

脊髄疾患に対する高圧酸素療法の経験

佐藤安一郎* 谷岡富美男** 本田謙一**
 豊岡憲治** 神敏郎** 松木明知**
 尾山力** 滝口雅博***

はじめに

弘前大学医学部附属病院高圧酸素治療室は、昭和49年5月1日より昭和56年4月30日までに、脊髄疾患患者に対し計430回の高圧酸素療法（以下OHP療法）を行い、良い結果を得たので代表的な1症例を挙げて、その治療成績を報告する。

対象患者及び治療方法

治療を行った脊髄疾患の症例を表1に示す。患者は29才から65才、平均50才の計12人で男10人、女2人であった。

治療方法はVickers社製のone man chamberを使用し、原則として1日1回の治療を行い、最

高圧力2 kg/cm²、30分間維持した。

治療回数は1回から126回、平均35.8回であった。治療回数1回の症例は患者が2回目からchamberに入ることを拒否した症例であった。

治療効果は、受傷又は手術後3週間の時点では、著効1例、有効8例、不変ないし不明3例であったが、同種疾患のOHP非治療群15例と比較すれば、一般的に症状の改善程度が良好であったと考えられ、かつ改善までに要した期日が2～3週間早かった。

代表的な1症例

症例は29才の男性、2～3才頃から脊柱の変形が認められていたが、成長に従って変形が強くな

表1 弘前大学医学部附属病院高圧酸素治療室における脊髄疾患の治療状況

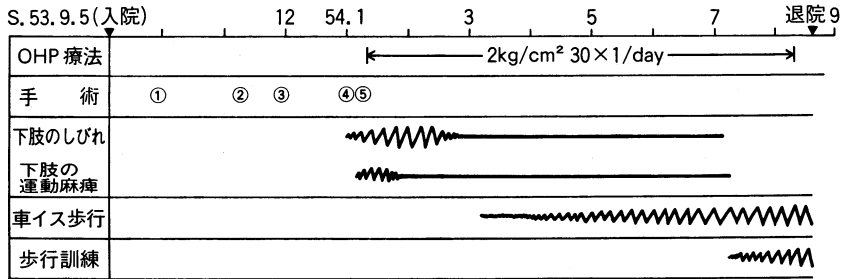
S. 50. 1～S. 55. 12

	氏名	年齢	性	診断名	治療期間	治療回数
1	K. S.	49	♀	Radiation myelopathy	S.50. 2. 6～S.50. 3. 10	19
2	K. M.	45	♀	Lumbar spinal cord injury	S.51. 1. 22～S.51. 3. 31	49
3	S. S.	65	♂	Spinal caries	S.51. 3. 16～S.51. 4. 12	16
4	K. M.	52	♂	post ope. Cervical myelopathy	S.53. 3. 3～S.53. 3. 24	10
5	S. H.	64	♂	post ope. Cervical spondylosis	S.53. 3. 3～S.53. 3. 24	10
6	K. S.	29	♂	post ope. Scoliosis paraplegia	S.54. 1. 10～S.54. 8. 10	126
7	T. S.	58	♂	Radiation myelopathy	S.54. 3. 5～S.54. 8. 6	100
8	M. S.	29	♂	Cervical spinal cord injury	S.54. 5. 25～S.54. 7. 12	25
9	M. H.	56	♂	post ope. quadriplegia	S.55. 5. 15～S.55. 6. 11	23
10	N. R.	40	♂	anterior spinal a. syndrome	S.55. 6. 5～S.55. 6. 11	8
11	J. W.	44	♂	post ope. spinal A-V malformation	S.55. 10. 24～S.55. 12. 26	43
12	Y. K.	63	♂	Cervical spinal cord injury	S.55. 12. 12	1

*弘前大学医学部附属病院高圧酸素治療室

**弘前大学医学部麻酔科

***弘前大学医学部附属病院救急部



- ① 53. 9. 27 ハローベルビック装着
- ② 53. 11. 8 脊髄後方解離術・骨切り術・胸部形成術
- ③ 53. 11. 29 脊椎固定
- ④ 53. 12. 27 ハーリントンロッド入れ替え術
- ⑤ 54. 1. 5 ハーリントンロッド抜去術

図1 治療経過

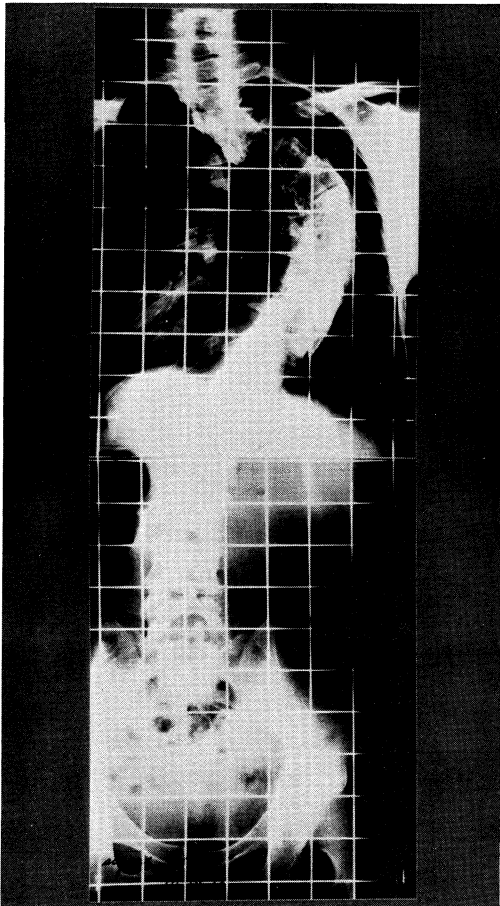


写真1

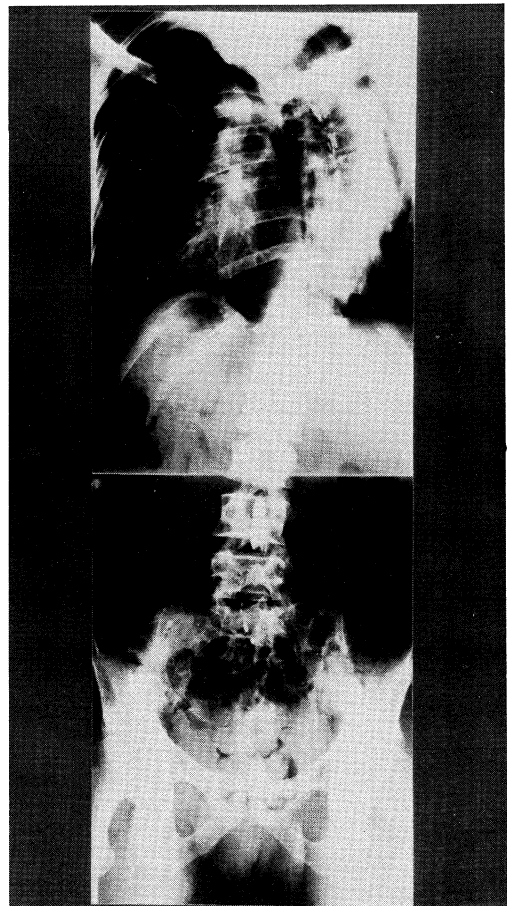


写真2

って来た。手術を行う2~3年前より、とくにこの傾向が強くなり、左肺部の慢性疼痛と呼吸困難を来すようになったため、手術的療法を希望して本院整形外科を受診した。

既往歴は、18才時に虫垂切除を行った他は特記すべき事なく、家族歴にも特記すべき事はない。

図1に治療経過を示した。

脊椎固定術後の昭和53年11月29日頃より下肢の

しびれ感が現れ、12月27日頃より次第に強くなって来た。12月30日頃には下肢の運動麻痺が発現し、昭和54年1月10日よりOHP療法を開始した。OHP療法を開始しても、しばらくの間しびれ感は強く存在したが、OHP6回目の1月18日頃より、内・外旋のみであるが右下肢の運動ができるようになった。治療回数31回目の2月23日頃よりしびれ感が弱くなり、3月5日頃より右足の自運動ができるようになって来た。治療回数93回目の6月19日からは車イスにてOHP治療室に来るようになり、7月5日より平行棒にて歩行訓練を開始、治療回数114回の7月18日より両松葉杖にて歩けるようになり、8月3日頃より自力で数メートルの歩行ができるようになった。

また、この症例は昭和54年8月19日、歩行は完全ではないが自宅に近い病院にて機能訓練を受けるため本院を退院した。

退院1カ月後には歩行も入院時と同じ位になり、職場へ復帰した。

入院時のレ線像を写真1に、退院時のレ線像を写真2に示した。

おわりに

脊髄疾患に対するOHP療法は、本院においての経験では、同様な疾患でOHP療法を施行しなかった以前の症例15例と比較してみると、次のような印象を受けた。

1. OHP療法を行った患者は2～3週間回復が早い。
2. 回復の程度が少し良い。

以上のことから脊髄疾患に対しても積極的に、しかも気長にOHP療法を行う必要があるものと思われる。